



第 17 号

平成 28 年 11 月 25 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10 月以降入会 1,000 円

会長代行に大田副会長、会計は山崎副会長が兼務 天野会長、病気により退任を表明

去る 6 月 25 日、定例の運営委員会が開かれた。今年度になって最初の運営委員会で、天野会長がこれからの 10 周年に向けての抱負を述べる挨拶から始まった。次いで、各委員会から今年の行事予定について発表が行われ、質疑応答、意見交換が行われた。そして、最後に天野会長が発言を求め、「つい先日、急病になり、急きょ入院した。細菌の急増殖による発病で大変な目に会った。今後も再発の恐れがあるので、会長職を降り、同時に岡山歴史研究会を退会したい。」との申し出があった。また、併せて、会計を兼務している石尾副会長から退会届が出ており、それを預かっている旨の発言があった。

会場の予約時間を過ぎており、その件についてその場で討議する時間がなく、運営委員会は終わった。

これを受け、大田、山崎の両副会長が天野会長の慰留に努め、併せて石尾副会長の後任の会計につ

いて運営委員の中でめばしいと思われる候補と折衝したが、いずれも効を奏さなかった。

これを受けて、8 月 18 日、臨時の運営委員会が開かれた。2 人の副会長と 8 名の運営委員が参加した。山崎副会長よりこれまでの経緯が報告された。そして、会則に則り、会長代行に副会長の大田氏、そして会則には取り決めはないが、会計は山崎副会長自らが兼任するという案が提示された。これに対し、運営委員全員から異論はなく、全員が賛同し、現在の会長の任期である来年度の総会までその体制で運営することが承認された。

次いで、10 月 27 日、顧問、運営委員の合同会議が開かれた。山崎副会長からこれまでの天野会長の退任に至る経緯が報告され、そして来年度の定期総会に至るまで、大田副会長が会長代行、会計は山崎副会長が兼務することが先の運営委員会で決まったことが報告された。顧問の方々から異論はなく、承認され、理解が得られた。

歴・研・展・望

準備してないのに、いきなりピンチヒッターに指名された打者のようなもので、落ち着かない気持ちで打席に立って居ります。会員皆様のご指導ご鞭撻、叱咤激励の程、何卒よろしくお願いいたします。

会の運営は天野前会長、石尾前副会長がこれまで注いでこられた岡山歴研への熱い思いをきちんと引き継ぎ、年度半ばでもありますので、基本方針は変えずに参ります。今年の基本方針は「次の結成十周年に向けて、改善すべきものは改善し、活力があり、魅力的な会にしていこう」というものだとは私は理解しております。

その中から二つ。一つは委員会の自主性。自由闊達に意見を出し合い、委員会活動を活発にしていこうと、会員や組織としての会も活性化して来るものと期待しております。

もう一つは歴史団体便覧の更なる活用。県下にたくさんある歴史団体との連携を強めることで、会の活動をいろんな形で広げていくことができるのではないかと、こちらも期待しております。

先日、運営委員の Y さんから「岡山には優れた先人、偉人が多いのに尋ねて行こうとしても、なかなか適当なマップがない。それを作ってはどうか」という提案がありました。なるほど。そういう際に、便覧づくりに協力して下さった他の団体との連携は勿論、さらには県下の各自治体の教育委員会、公民館等との連携にまで広げていけば、かなり充実した素晴らしい「先人・偉人マップ」ができるのではと思っています。

岡山歴研を生き生きとした、いい会にしていけるのは会員皆さん、一人一人の思いや力です。よろしくお願いいたします。

(会長代行 大田弘之)

全国歴史研究会第32回全国大会（美し国三重、津大会）に参加して

雪吉 政子

去る10月21日～23日、津市で開催された全国大会に岡山歴史研究会から8名が参加した。到着早々、「あれ、今年はハッピーを着てないの?」という質問。岡山のハッピーは大会々場では目立つ存在だったのを改めて思い知った。そして今年三重・津大会では主催者の方々が緑色のハッピーを着用。その背中に白色で三重県の地図が入っていた。三重県は総勢80名の参加。役員22名が大歓迎のおもてなしだった。

初日の式典直後に鳥取の地震の影響があったが、6階会場の天井の照明が少々ゆれただけで意外と皆さんは無関心の様子。が、三重県の皆様の心温まるおもてなしに県外参加者97名も顔なじみの知人たちと談笑、和気あいあい。情報交換の場になっているこの大会の意味を知った。その大会が来年度は未定との事。よい返事が来るのを楽しみにしている。

記念講演は岡田登教授（皇學館大學）の「倭姫命の伊勢巡幸」と門暉代司氏（三重県史編集委員）の「伊勢商人のルーツを探る」だった。

配布された資料「倭姫命の伊勢巡幸」の中に「吉備武彦、吉備穴戸武姫、吉備 名方浜宮や岡山県岡山市北区番町 伊勢神社」などの字があると心なしか伊勢の地名も身近に思え、時代も心なしか今に近いような錯覚を感じるの是一時の感傷か。ともかく「斉王の原型」に多少とも触れられたのは今回の収穫であった。

近江商人または江商（ごうしょう）という言葉はよく耳にしている。現在の大手企業の元祖に近江商人は少なくないが、伊勢商人は私の無知の故かあまり知らなかった。門氏の講演で開眼した。従って伊勢木綿のことも。岡山県内の店内をよく探してみよう。振り返って備中の商人は？備中鍬は備中松山藩の製品として市場に出廻り、後世にも伝え、使われている。玉島綿は備中綿ともいい、これまた松山藩の産物である。県北では作州緋か。お土産に伊勢木綿の名刺入れをいただく。

見学の行程で元紡績工場の跡地の展示場に入った。倉敷のアイビススクエアと同じ考えを見て思わず微笑む。倉敷のクラボウ跡地の方が現在相当の収益を上げていると思う。地元は感謝。地元民の欲目か？

2泊3日の駆け足見学で消化不良気味である。もう一度ゆっくり、地図と磁石を持って歩きたい地であった。

地元三重の方々に感謝。（会員）



▲藤堂高虎の像の前にて

吉備国「和牛のふるさとものがたり」発刊にあたって

一般財団法人岡山農山村地域研究所 代表理事 村上 進通（元岡山県農林水産部長）

豊かで、温暖な気候に恵まれた吉備国（きびのくに）は、早くから農耕が発達し、古代日本の発展をリードし、その吉備国の歴史と伝統を受け継ぐおかやまは、また、中四国一の農業県として、国民食糧の供給と地域の発展に貢献してきました。

二十一世紀を見ることなく逝った司馬遼太郎は、「吉備という語感には、豊饒さという感じがあります。塩と鉄という決め手を持っている。ひょっとすると大和よりも魅力的な古代を持っていたと言えるかもしれない。」と語っています。

お米や果物等とともに、農業生産の中核を成す畜産分野においても、また、おかやまが先駆的役割を果たしたのも、司馬遼太郎の言う“豊饒”をめざしたひとつの変革の姿であると思います。

即ち、コシヒカリやササニシキなど、お米のルーツは「朝日米」であり、酒米の「山田錦」や「五百万石」を生み出したのは、幻の酒米「雄町米」であり、また、「白鳳」や「あかつき」など全国の桃の主要品種は、大久保重五郎が生んだ「白桃」がルーツなのです。

そして、畜産分野においても、わが国最古の「蔓牛」（つるうし）は、備中国阿賀郡竹の谷（現新見市神郷）の難波

元助、千代平、元助（二代目）の、三代の手による「竹の谷蔓」であり、その取り組みは、今から240年も前の安永（1772年～80年）年間に始まるとされています。

この「竹の谷蔓」は、さらに分かれて、日本の和牛のルーツとなり、その後、名高い新見市千屋の太田辰五郎などの手によって、名牛「第13花山」などを生み、今日の「千屋牛」をはじめ「備中牛」「奈義ビーフ」などを育ててきました。

このように、岡山の和牛は、お米や白桃、ぶどうのマスカット、ピオーネなどとともに、全国、世界に誇るすばらしいおかやまの、同時に日本の“財産”なのです。

そうした思いを込めて、この度「吉備国 和牛のふるさとものがたり」（28年11月、山陽新聞社刊、本体1,500円＋税）を上梓致しました。

今を生きる私たちは、この歴史と伝統を生き抜いてきた「おかやまの宝」についての理解と認識を深め、地産地消を大いに進めるなど大切に守り、次代に引き継いで行かなければならないと思います。

未来に生きる子供たちと地域の発展のために！



吉備国の語源考

キワラビ キ ビ
黄薇と羈縻説

丸谷 健二

1. はじめに

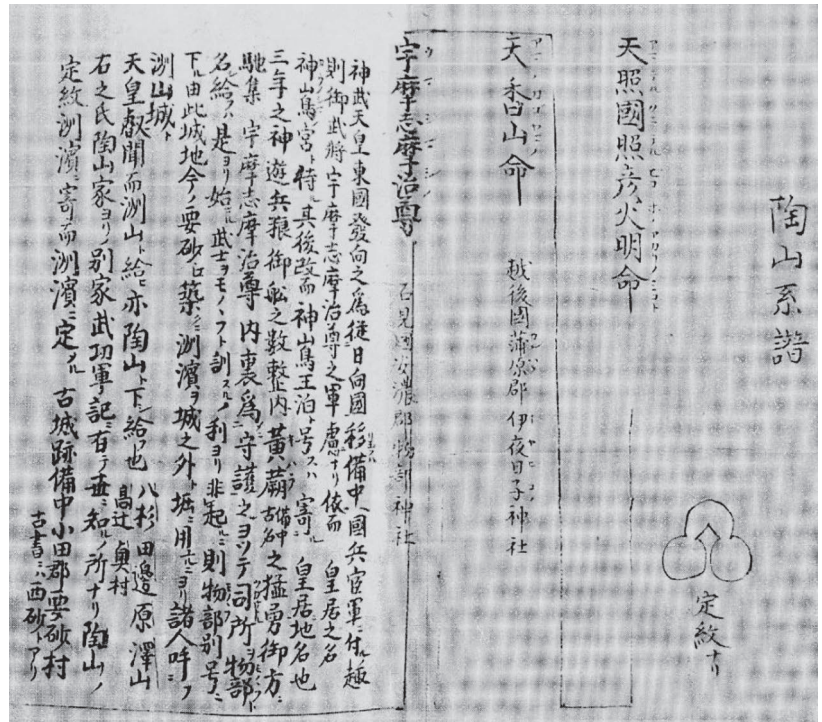
われわれの棲む岡山は、かつて吉備の国といわれてきました。その語源についてこれまで調査し、報告してきました。黄薇に由来するという説と羈縻説が有力であることがわかりました。以下に、それについての経緯および内容を報告します。

2. 『陶山（すやま）系譜』にある備中古名『黄薇・キハラ』の発見

平成 20 年 8 月、大井透氏（香川県坂出市）より『陶山系譜』（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵：香川県高松市亀水町）の調査を依頼されました。

『陶山系譜』は神統譜です。元祖は天照国輝彦火明命とあり、尾張連等の遠祖であります。神話に登場する神々から始まる系図であり、それに近い事実が伝承されてきたと考えられました。

その中に、備中古名『黄薇・キハラ』とのルビがありました。私には備中古名『黄薇・キハラ』は初見でした。指導を受けている考古学、中世史の先生方に尋ねりましたが、誰も知りませんでした。大井透氏に一度は調査不可能として断りましたが、『陶山系譜』にある『黄薇・キハラ』が吉備の語源であるとする大井氏の説が今でも有力と考えます。



▲『陶山系譜』

3. 文献調査結果

岡山県立記録資料館と岡山県立図書館蔵書を調査しました。

① 平成 13 年（2001）『日本古代地名事典』 吉田茂樹 『君・公説』

従来より「きび（黍）」の意として定着しているが、古代 地名の比較検討からすれば、「きび（黍）」の意は、ほとんどないといってよい。大化前代より、ヤマト王権の片腕として活躍し地方の首長の尊称である「きみ（君・公）」を国名にした可能性がある。

② 平成 2 年（1990）『岡山県史第三巻 古代Ⅱ』 吉田晶 『不明・黍説紹介』

現在の岡山県全域と広島県東部を中心とする地域（美作・備前・備中・備後）は、古代では「吉備（きび）」と総称されていた。なぜこの地域が「吉備」と呼ばれていたのかは明らかではない。古くから「黍（きび）」の豊かに稔る農耕の適地であったためであろうとする説が主張されているが、確かなことはわからない。

③ 昭和 5 年（1930）『岡山県通史』 永山卯三郎 『黍説』

『吉備の文字、一様ならず、日本紀に「吉備」、日本紀纂疏に「寸籴（きび）」、古事記に「岐備」又「黄薇」と記し、又夜叉国、廣遠国と見ゆ。』『吉備の名義 大成旧事本紀に「黄薇（キワラヒ）国、作者作吉備之字」と黄薇「キワラビ」省略されて「キビ」となると面白き説明なり。固より信據するに足らざる俗説なれども従来汎く世に行はれたる説なり。』『吉備はキビ（黍）にして吉備国の土地、黍穀の耕種に好適しその産額頗る多く古来黍酒、黍団子の料となりしことは万葉集の歌にも見えて其の名産なり。』

④ 嘉永 2 年 (1849) 自序『吉備国史』 小早川秀雄 『黄蕨説』

吉備国 大古は大八州の国とて八つ国有り其八つの一つは吉備の国なり。吉備とは何故に云う。其本きわらびの国と云ふ事を略して、きびと云ふなり。此国には黄なるわらびの多く生ずるの山国なれば吉備山とも云ふ。藻塩草に吉備山を載せたり。古語拾遺に云ふ神武帝の時、高嶋宮にます事七年其時に黄なるわらび六本を生ずると云ふ。わらびは山に生ずる品物なれば上古は山のみにて田野は後に開き発（おこ）しめる土地かとは思はる。

⑤ 天保 8 年 (1837) 『東備郡村志』 松本亮 『寸籓説』

「大成経には、人皇の大祖神武天皇東征して、吉備国に入り給ひ、高島の宮に在るとき、其行宮の庭に一夜に八の蕨を生ず。其長一条二尺、其太さ二尺五寸、其色濃黄、国有神人云黄光命。即朝奏曰、此草異艸也。当治八州祥、是天為端、軍卒競之故、道此国号黄蕨国とみえたり。ここに以て、吉備は黄蕨の転なるか。然れども其説疑ふらくは正しからず。按に、吉備国を日本記の釈に寸籓（きび）に作る。然れば吉備は寸籓の転なるべし。寸籓とは当国に名高き蕨山より起れるか。・・・」

⑥ 安永 7 年 (1778) 『寸籓乃塵 上巻』 土肥経平 『寸籓説』

「吉備国ていふは、吉備子州大八州の一にして、大日本のなり出し時にその称あれば、類もなき古き国名なり。是を寸籓国とも昔し書しより日本記の釈并纂疏に見えたり。又黄蕨国ともかく。それは神武天皇東征したまふ時に、此国高嶋宮にしばし皇居の時、黄なる蕨一夜の中に生出て、是を供御にまいらせしより、黄蕨といふよし、大成経といふものに見えしといへども、此書據とすべきものならねば、信ずべからず。」

⑦ 元文 4 年 (1739) 『備陽国誌』 和田弥兵衛正尹他 『不明・黄蕨説紹介』

「大成経に清貞天皇（忍海飯豊青尊）詔りして尾張の覚連を以て、黄蕨（吉備の文字を黄蕨と出来大正史に見えず、今此書に初て出たり。）の前中後を分とあり。是より先日本紀仁徳天皇六十七年に、吉備の中国といふ事見えたり。いづれか是なる事をしらす。」

4. 『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の発見

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』は、岡山県立図書館と岡山大学図書館蔵書になっています。『続神道大系』で 4 冊に分冊され、黄蕨国は、『先代旧事本紀大成経（一）・続神道体系 論説編』 小笠原春夫校注 平成 11 年 神道体系編纂会に収録されています。推古 30 年（622）成立です。黄蕨、黄蕨津彦命に注目してください。

5. 『吉備国の語源 黄蕨と羈縻（きび）政策』

岡山県の歴史研究者として黄蕨説を正しいとしているのは、『吉備国史』の小早川秀雄のみです。吉備の語源は黄蕨です。黄蕨国の「黄なるわらび八本を生ずる」の比喩している意味の解説が必要です。岡山県の江戸時代から戦前までの研究者は、「8 本の黄色いワラビ」を植物生態学と考え「ワラビの突然変異」として考察しています。植物生態学説を間違いと考え、地名学で考察し突蕨国にたどり着きました。

5.1 地名学と突蕨国

地名学とは「人が動けば地名が残る」という発想です。地名学で考察し突蕨国にたどり着きました。黄蕨国は突蕨国からの渡来者（トルコ系民族の遠祖）が建国したと考え突蕨国を調査しました。突蕨帝国の成立は 552 年であり、583 年にモンゴル高原を本拠とする東突蕨と、中央アジアを支配する西突蕨に分裂しました。突蕨国内にはソクド人が多く、突蕨と中国・ササン朝ペルシャ・東ローマ帝国を仲介する使節の役目を果たしていました。

5.2 突蕨国の人名「中国の（二十四史）突厥伝 622 年以前調査」と岡山県地名の比較

「テュルクのカガン系譜」の中の 5 人の名前と、岡山県内の地名が一致している事実を発見しました。突蕨国の東西分裂は 583 年であり、分裂による混乱により黄蕨国へ渡来したと考えました。

大歳在乙卯、三月甲寅朔己未、從入黃蕨國、今、起行宮居御、是曰高島宮、積三年間、而楯舟楫蓄兵食也、將欲以一舉而平天下也、大己貴尊兒木賄彥命神、又黃蕨津彥命、爲國首在國頭見天孫、作敬與兒國君命、奉饗奉事、自造陳具、集兵調陳、進奉皇軍、于時行宮庭一夜生八蕨、其長一丈二尺、其太二尺五寸、甚色濃黃、國有入神、云黃光命、即朝奏曰、此草異草也、當治八州祥、是天爲瑞、軍卒競之、故道此國號黃蕨國、

- ① 可汗（カガン・可汗とは君主号）と岡山市南区妹尾の汗入（あせり）
- ② 突厥国バルハシ湖のイリ川と備前市の伊里川
- ③ 伊利可汗（イリグカガン）（552～553）・頡利可汗（イリカガン）（620～630）と備前市伊里（いり）
- ④ 地頭（イリクの子）と総社市地頭片山（古墳・地頭に 21 基）、高梁市川上町地頭（大杉塚古墳）、鳥取県八頭郡智頭町（智頭枕田遺跡）
- ⑤ バガ可汗（587～588）（乙息記の子）とハガ遺跡（岡山市高島小学校）、岡山市北区芳賀（はが）（飯盛山古墳・打越塚古墳）、久米郡美咲町大坪和 坪和（はが）
- ⑥ 阿波可汗（大邏便、アパカガン）（581～587）（木杵可汗の子）と津山市阿波（あば）

5.3 DNA による解析「日本民族の源流は何処か」

松本秀雄氏は、日本民族の源流を考えると、「日本民族の基層をなす人々は北方型蒙古系民族に属し、その源流はバイカル湖畔にある。」と結論づけています。シベリアのバイカル湖畔のブリアート人は日本人と酷似しています。ロシアのバイカル湖の近くに東突厥国がありました。人口の増加とともに、流れの豊かなアムール河を下って日本列島に到達することは、さほど困難なことではありません。

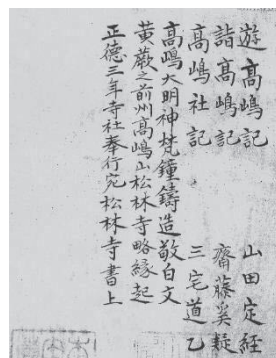
5.4 羈縻（きび）政策

突厥国を調査していて羈縻を知りました。古代中国皇帝が周辺諸国の君主と名目的君臣関係を結び、国際秩序が維持されていました。突厥国の東西分裂は 583 年であり、分裂による混乱により黄蕨国へ渡来し、突厥国への羈縻（きび）が、そのまま黄蕨国に持ち込まれたと考えました。羈縻とは「羈：牛の手綱、縻：牛の鼻綱」を意味しています。つまり、「手綱・鼻綱で周辺諸国を中国から離反しないように繋ぎ止めておく」古代中国の間接支配の方法です。突厥国は 7 世紀末に唐から独立し、683 年に突厥第 2 帝国が成立し 744 年に滅亡しました。

6. 黄蕨国の最古の記録

岡山大学の池田家文書の、正徳 3 年（1713）『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』の「黄蕨之前州」は黄蕨国の最古の記録です。推古 30 年（622）には黄蕨国が成立していました。

推古 30 年（622）成立の『先代旧事本紀大成経』巻第三 陰陽本紀に、「此神座黄蕨前国一宮矣、潤世界神、有威徳神」と記録されています。



7. まとめ 「嘉字地名」と羈縻（きび）政策

奈良時代に風土記の撰述に際して、和銅 6 年（713）の詔勅「郡、郷名を嘉字二字を以て示せ」があります。地名には縁起の良い字（嘉字）を当てよとの詔です。しかし、この詔勅の目的を説明した論文は無いようです。柳田国男氏は『地名の研究』のなかで、「人間の行為であるとすれば、その趣旨や目的の無いはずはない」とし、先住民の縄文人がつけたか、アイヌ人がつけたか、または新たに侵入した渡来人がつけたにしても、地名をつけた目的が必ずあったとしています。私は、この詔勅の目的は羈縻政策を隠すことにあったと考えます。つまり、吉備国の語源は羈縻政策となります。皆様の説をお待ちしています。

8. 参考文献

黄蕨（きび）国の物語 http://www.geocities.jp/ki_warabi/new_page_7.htm

- ① 吉備国の語源「黄蕨」調査報告書 平成 20 年 8 月 24 日 丸谷憲二
- ② 黄蕨国の解析『突厥国からの渡来者集団が建国』平成 22 年 8 月 19 日 丸谷憲二
- ③ 吉備津神社の注連縄柱 『黄蕨の考察』平成 23 年 12 月 7 日 丸谷憲二
- ④ キルギス共和国と日本 平成 25 年 1 月 丸谷憲二
- ⑤ 吉備国の語源「黄蕨」と羈縻政策 平成 25 年 3 月 19 日 丸谷憲二
- ⑥ 吉備児島と神武天皇聖跡高島宮伝説地の考察 平成 27 年 6 月 26 日 丸谷憲二

大井透氏（香川県坂出市）は、私の 2 冊目の著書『荘内半島の中世史 学館院記録書文書調査報告書』平成 26 年 9 月 恩徳寺寺史編纂室出版の共同執筆です。執筆のための史料調査で『陶山系譜』を発見されました。

（会員）

稲 作 伝 来 の こ ろ

山崎 泰二

稲（イネ）の歴史

1. 2,500 年の稲との歴史を生かせ

稲は水耕稲作の技術によって連作障害を克服した。ある意味当時の一大革命と表現しても良いと私は思っています。種類はジャポニカ米で今日まで基本性質は変わっていないそうです。

米が穀物のなかで美味しいことは縄文人も知っていて、焼畑を移動しながら陸稲（おかぼ）として栽培していたことが高橋護先生（元ノートルダム清心女子大学＝岡山）によって定説化されています。彼らはイネが連作を嫌うことを知り、焼畑で移動しながら小規模な耕作をしていたようです。インドから中国南部今の江南地方に伝来したイネは大河の水郷地帯でした。水辺で育てる技術を持った渡来人が日本列島にきたのが今から約 2500 年昔のことです。（弥生時代のはじまり）

日本列島の自然が醸し出す、栄養分の多い清水が程よい小川となり、管理しやすい耕作地（水田）が土木技術の未発達な弥生人でも耕作でき、列島に一気に拡がり定着しました。8 月の熱い最中に水を断ち地面が割れるほど乾燥させます。その後たっぷり水を与えるこの技術が連作障害を乗り越える技術なのです。

山に降った雨水は落ち葉を通して地下水となり再び地面に出て小川になるのです。この水には栄養分が一杯含まれており、今日でも棚田を管理している先人は無肥料でも十分な収穫があったと回顧しています。

古代人は瑞穂の国ヤマトを賞賛し、八重穂を神に捧げ感謝しました。水とお日様（太陽）そして大地に恵まれた、わが国は古来から、まれに見るイネ作に適した環境だったのです。

2. 日本人は縄文人と弥生人の末裔

今日の日本人は地球に発生した原始人類が大陸と陸続きであった時代に渡来し、石器時代を経て縄文人として約 1 万 5000 年の歴史があります。その後約 2500 年昔、主に中国揚子江下流の江南地方から日本列島に渡来し在来縄文人との和合の中で弥生人なる社会が構成され今日があると言われています。

日本列島に渡来した人々は、温暖で海洋気候に恵まれ、山に緑が存在し、小川は程よい河川となり、火山噴火で遠浅の海岸線が広がる、静かな海には故郷（中国江南地方）と違う蓬莱の地を得たと、私は連想します。今から見れば未熟な道具を用いて、川に遡上する魚を捕獲し、山の果実を収穫し、飼育

している犬の協力で小動物を追うなど、次々に展開する光景は戦後暫らく我々が体験した故郷の光景と重なります。

後に弥生人と呼ばれる人達によって水稲耕作でのイネ栽培は将に革命でした。食糧の保存が出来て、富の蓄えが近隣の産物（鉄・塩・絹など）との交易で飛躍的に人口も増え卑弥呼の世界を経て国体の基礎が固まりました。その全ての源が水稲耕作なのです。

3. 古代社会の大産業革命と異民族の融和 ——水耕稲作乾田栽培方式——

1) 稲作の原産地はインドから始まった

稲は日本の在来種ではありません。学校教育では稲作開始が弥生時代の始まると教わりました。石の道具を使う先人が新石器時代を築き、狩猟（動物・植物）をしていたのが縄文人で、肉の煮炊きのために縄文土器が発生したと一般に教えられているのです。しかし最近の学者や専門家の定説は少し違うようです。

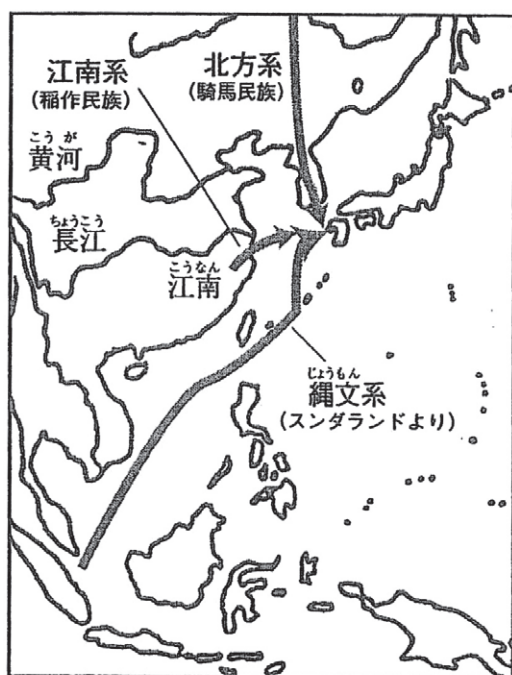
ノートルダム清心大の高橋護（まもる）名誉教授（岡山在住）らの研究が学会の定説になっていることを知りました。縄文時代の中頃には動物の狩猟・植物の採取から家畜の飼育、穀類の栽培が始まっているとのことです。青森の三内（さんだい）丸山縄文遺跡では、野生種の栗の中から粒の大きいものを選んで住居の近くで栽培し、集団で何代も定住していた様子が明らかになっています。縄文人は狩猟や、硬い果実（栗・どんぐり等）を採取し、川を遡上してくる鮭・鱒などを簡単な木弓や槍で捕っていたのです。塩分は生肉から得ていました。

石器時代から面々と繋がっている縄文人も、元々大陸から移動してきた旧モンゴロイド人であります。（旧モンゴロイドの発生地は現在のインドネシアを源郷にしたスダンランドより海洋・大陸を北上した）

地球の最後の氷河期が終わるのは 1 万年前ですが 2 万年以前は大陸と陸続きで、海面が今より 130 m も低かったそうです。

瀬戸内海は草原でマンモスが生息していたのです。今でも底引き網漁業でマンモスの骨が揚がり話題になることがあります。人間も歩いて移住して来ました。氷河期以前から移住して来ていた旧モンゴロイドと、寒い氷河期を大陸で経験した新モンゴロイド人に外形の差は多少あっても同じ黄色人種です。新石器時代から住む原住民との合体が日本列島で縄文人として進化します。

《第一の融和》



▲縄文・江南・北方の三民族の融合

図-1 縄文系を参照

彼等は大陸の穀物を持ち込みました（粟や稗）。特に稲・米は他の食材に比べて灰汁（アク）がなく美味しいことを知っていました。栽培は原則畑作＝陸稲で、なだらかで配水の良いやや傾斜した土地を選び焼畑農法で栽培を始めるのです。肥料分がなくなり、連作障害が出始めると移動して行きます。小動物の捕獲に犬などを使っていましたが収穫も限られていますから人口も当然少なく、動物性蛋白質は河川を遡上する大型の鮭・鱒などが得やすい食べ物でした。一般に列島内における縄文人の分布は東北北陸地方が多いのです。その末流が青森の三内丸山遺跡でありアイヌの人々でしょう。

稲作が発生したインドや東南アジアそして中国の揚子江流域では、水耕稲作の初期の姿が発生します。しかし大河の土地の排水は今でも克服されていません。粟・麦やトウモロコシより湿地に強い稲の栽培が進んだのです。同じ中国でも今の北京等の華北地方は現在でも畑作が中心です。ジャポニカ種の稲にも熱帯種と温帯種に分けられるようですが、日本には温帯タイプが定着しました。

2) 稲作の日本列島渡来

紀元前 500 年ごろの中国は、孔子が儒教を説いており、あの有名な万里の長城を秦の始皇帝が、北方騎馬民族の襲来にそなえるために、民衆を駆使して建設遂行中でした。大陸の戦乱は民衆を巻き込み、敗北は民族の抹殺と奴隷としての悲惨な道しかないの

です。始皇帝亡き後の三国史時代歴史書に登場する劉邦・項羽や軍師の諸葛孔明が活躍しました。当時の戦いは部将（軍隊）だけの戦いだけではなく、民族同士の闘いです。

北方騎馬民族にやられた華北の漢民族は南部の華南地域の国々を襲います。弱い人民の多くは土地を捨て、決死の思いで海（東シナ海）に逃げます。竹筏を繋ぎ合わせた簡単な舟に帆と櫓で大陸棚を横切り、それを過ぎると暖流の北上する黒潮の大きな海流に乗ることが出来ます。当面の食材の稲米などを持参していました。雨水を飲料にしてしのぎます。

先ず五島列島・九州島が漂流地です。緑の山が遠くに見え隠れし段々と近づくと、歓喜の思いで上陸。美味しい水を飲み、柔らかい果実を堪能し生きる希望が湧いて来ます。幸いにこの地は温暖でした。（五島列島では記紀に符合する史実の地が残っていて、その研究成果を「日本国家の起源・五島列島に実在した高天原」として松野尾辰五郎氏が発表された本を娘さんの村山三枝子氏＝岡山在住が再版されそれを拝読しました。稲作伝来と記紀が符号する貴重な資料です。）

稲作は本来、連作のできない代表的な穀物です。それを弥生人が水耕稲作乾田方式の栽培技術で連作可能な穀物に変えたのです。

同じ米を畑で麦と同じように栽培すれば連作障害が現れるのです。新しい上流の水を田に供給すれば、水の中には豊富な栄養分と空気が含まれています。重要なのは稲の生育途中で完全に排水をして田の表面を乾燥させるタイミングを伴う技術であります。程よい落差があって小区画の面積の田の方が排水管理をしやすいのです。

彼等は三々五々上陸した大きな河口から配水の管理が容易な小さな小川の水辺を求めて遡上して行きます。程よい岸辺に畦を作り川の水を導入し、持参



図-2 日本近海海流図

した稲穂を蒔きます。半年もすれば稲穂が垂れます。日本列島の先住民である縄文人が、魚を捕獲するために川辺に来て、異人達（新渡来人）の様子を伺っています。収穫期の稲穂を見て驚きです。自分たちの焼畑で作る同じ稲が何倍もの収穫を同じところで得ているのです。羨望の眼差しで新渡来人の生活を覗き様子を観察しています。

3) 外来人と在来人の平和的融和は世界史上特異なもの 高く評価すべき！！

世界の歴史の中で新渡来人と在来人が戦いをしないで融和したのは、この当時の日本列島の大きな特徴で、高く評価されるべきです。新しい人種＝弥生人が誕生することになります。先に述べたように中国の江南地方の戦乱を回避して海に逃れ黒潮の暖流に乗り日本列島に漂流した渡来人。大陸では本来、異民族と衝突すると、生きるか死ぬかの戦いが当然の時代です。漂着した避難民は少数で武器等は持っていません。裸一貫の無防備状況です。在来人の襲撃を受けますと一たまりもありません。殲滅の危機状態でした。

列島内での縄文人は西日本には分布も少なかったことや、生活の手段の場が違っていたこともありました。しかし最大の理由は先に述べた通り、縄文人も陸稲（おかぼ）で稲の栽培を既に行っていたこと。渡来人の新技術のレベルの高さに驚嘆し羨望の眼差しで見っていました。収穫は少なく移住を余儀なくされる焼畑農作より、小川の付近に定住して同じ場所で豊富な収穫のある水耕稲作は、現代人が電気を発明し、自然界には存在しない原子力を、平和利用と称して発電に利用している今日の比ではありません。その証拠に水耕稲作はその後 2500 年後の今日まで続いています。

渡来した人々にも弱みがあります。東シナ海を渡って来た江南人は婦女子が極端に少なく屈強な男子社会でした。在来人との融和は子孫を残す上でも必要なことです。幸い同じモンゴロイドの黄色人種です。言葉も自然に通じ合い、和合の度合いが益々増えます。稲の栽培方法は違っても、石包丁や土器・農具など穀物栽培に関して共通点も助けになります。食べられる山野の果樹の実など、縄文人の生活の知恵はそのまま引き継がれました。

4) 当時の生活の様子（主に弥生時代）

稲＝米は他の食材に比べて保存可能で、2～3 年の災害等で収穫が出来なくても再起が可能でした。食生活が充実しますと、自然に人口は増えます。共同作業をして耕地を拡大すれば成果も大きく、川下の小川の辺から始まった水田も段々と広がって、中流域に達します。給水・排水の利便には農業土木の技術の発展（農具の発展）が必要です。当時の日本列島で鉄は産出していませんが、部材として使った形跡が残っています。黒曜石のサヌカトなどの石器は隠岐や伊豆諸島

から運ばれて広がっています。そろそろ金属加工（主に銅製品）の技術集団の発生を見る時代に入ります。

穀物を主に食材とするようになって、困るのはミネラル＝塩の補給です。海に近いと貝や海の魚から得られますが、山間部では不足しますし野生の狩猟も限られています。海で採れた海草や魚介類を干物にして、米と交換する集団が発生します。製塩も専業として始まったようです。山間部では薪や炭を農閑期に作る光景は今なお続いています。炭は金属加工に必要で、薪は製塩に欠かせません。

縄文・弥生の人々は私有の概念がありません。全て共同作業・共同生活です。海辺で魚介類を採取し生活は安全な高地で住居し集団で暮らしました。岡山県でも水島の種松山、児島の貝殻山には高地性集落や貝塚の跡が残っています。海の魚を捕らえるより浅瀬の海で貝類を捕獲する方が容易でした。貝塚の多いのもその辺の事情でしょう。

余談ですが人間は素潜りで海中の中で目を開けても良く見えません。箱メガネなどの道具や潜水用具の発達が必要です。しかし鵜のように水中で潜水し魚を捕らえる鳥たちを身近に見ていました。鵜飼の始まりは以外に早く、記紀（古事記・日本書紀）の始めの段階にも出てきます。今日でも神聖化して宮内庁の管理のもと伝統漁法として伝わっています。

魏志倭人伝にも絹のことが出ています。生糸（養蚕）は 5 世紀に伝わったとされていますから弥生時代は絹の生産はありません。しかし栽培種の粟に巻きつく山繭の存在を彼等が見落す訳がありません。日本の中国地方の山峡を散策していますと、今でも山繭を見かけます。金（黄緑）糸は貴重でした。卑弥呼が中国の魏王に献上したのは黄金に輝く金糸であったと想像しています。（**学者も証明済み**）漆の採取も知っていたことでしょう。吉備の山間地には漆が多く自生しています。漆技術は中国より日本列島の方が 1000 年も早く、縄文中期の遺物が出ています。



繊維質の多い麻や三桮（みつまた）・コウゾは今では和紙の材料ですが当時は、水にさらし柔らかくして布にしました。木綿（ゆう）と書きますが綿から採った糸で編んだ今日の木綿（もめん）ではありません。着物は当時機織機が有りませんから当然女性らによる手織りでした。枝に縦糸をつなぎ睡でシャトルのように行き来して編み上げて行ったのです。今でも布の幅は女性の肩幅（30～40 cm）と決まっています。女性は巻頭衣として、男性は横幅布衣として着用しました。獣の皮も重要な衣類でした。

住宅は竪穴式から高床式に徐々に変わります。穀

類の保管には今も昔も鼠との戦いです。材料は近くの木材を使いました。中でも栽培種の栗材は重宝のように縄文住居跡からも出土しています。実は食べ、残りは貯蔵穴に保管し貴重な保存食で、木材は住居の柱になり、薪や炭になりました。

この頃食卓に銘々皿が出るようになります。高杯(たかつき) (古代文字=籩豆・たかつき) は古代には豆の文字をあてました。高杯の形が豆に似ているからでしょうか。豆は米などの外来種ではありません。日本列島の在来種だと岡山大学の山本悦世教授に教わりました。豆は自分の力で栄養源の窒素を作り出す貴重な食材で、東京農大の小泉武夫名誉教授は「田圃で稲を作り、畦に植えた大豆が貴重な食材になった」「先人に学ぶべきだ」との説に敬服したものです。当時箸は使いません。手で食べていました。美味しいものが食卓に並びますと「指食が動く」と申します。今でも人指し指のことを「食指」と称しますと佐原真先生は話していました。「箸」は 8 世紀になり普及したようです。卑弥呼女王も手食でした。箸の持てない子供と同じですね。

5) 稲の富が人口を増やす

生活が多様で豊かになりますと人口は当然増えます。先に見たように水耕稲作が進歩しますと、周辺の仕事が特化され専門化します。耕作地を増やすために丈夫な農具が必要です。硬い木材を石斧で加工していましたが、金属加工の技術が少しずつ入ってきます。当初は銅やその合金でしたが、大陸や朝鮮半島から鉄材が入ります。貴重な鉄材は再加工して何度も使いこなします。

余談になりますが、歴史区分をする時に世界史的には武器を中心に行います。石器・青銅器・鉄器・と続き今は原子爆弾の時代と称すべきでしょうか。日本では生活用品で表します。石器は同じですが縄文時代はあの炎形の縄文土器。弥生も弥生土器が東京文京区の東大農学部のある弥生町から出土した土器から命名され、続く古墳時代は祭祀の場でもある墓が世界的に見ても特異な形(前方後円墳)で 400 年間も続きました。後は政治の中心地=都の場所が時代区分になっています。日本人は元来戦いを好みません。

農耕中心の弥生人は、在来の縄文人と中国江南地方の流民の混血・和合によって日本列島を席卷して参ります。自然との共生による集団社会が想定できます。九州北部などでは環濠集落が発生します。共同作業をして自分たちの財産を守るにはある種の柵や濠が必要でした。学者によっては「弥生人は戦闘が好きで、余力が出来ると近隣の集落を攻めた」と説明しています。

確かにその面も否定できませんが、岡山の地で古代吉備を想定する時そのようには見えません。集団としての帰属意識を高め、ある種の今の言葉で「宗教的」な祭祀が始まったと見るべきでしょう。余力を戦闘ではなく、新しい祭祀へ集結したと考えます。

私は稲作生産の余剰力は他の物資との交換・交易に使われたと思うのです。物資だけではありません当時の文化情報も相当に進化していました。紀元前 500 年前後に中国で発生した道教が鬼道の形で日本列島に弥生の中期～後期には入ってきています。魏志倭人伝の卑弥呼の件(くだん)は有名です。その道教は日本社会に深化し、神事・仏事と合体し今なお我々の生活の中に生き付いているのです。十二支も当(まさ)に道教の世界なのです。特に道教は自然との共生による世界観でした。弥生社会には大切なことです。自然崇拝から先祖崇拝。そして情報物資の交流・交易が当時の人々の関心ごとだったのです。

6) 弥生時代の祭祀

農耕を中心とした小集落の弥生社会にとって一番重要なのは、太陽や雨風の自然現象です。弱い人間の力ではどうすることの出来ない自然との共生は、先人の知恵の継承が大切で、そうした知恵の保有者が集落の中心人物として尊敬されました。最も良く知られているのが日本特有の銅鐸です。一般に祭祀に使われたと説明されていますが、当時大切な金属を農具や武器ではなく祭祀に使ったことが重要な意味を持ちます。(大陸では主に武器に使った)一般に銅鐸は後に大和と称される畿内地方を中心に山陰地方まで広く分布しています。どうした訳か九州では殆ど出土していないのに、鋳型だけは九州で出ているのです。銅鐸は中国江南地方の銅鼓(どうこ)が原点との説もあります。稲文化と共に伝来したのでしょうか。

元々金属加工技術の発達をしていたのは、朝鮮半島南部と同族の倭族が九州島北部・隠岐出雲一帯で、九州で創られた銅鐸は出雲で量産され、それが畿内まで波及したと考えてみるとその方が自然と思えます。対馬海流に乗ると能登半島・若狭湾は近く、琵琶湖を経由すれば以外に畿内には短期間で交流が出来ます。銅鐸を用いて集落でどのような祭祀が行われていたのか、学者ははっきりと示してくれてはいません。

平成 8 年(1996) 島根の加茂岩倉で農道建設中に偶然に 39 個が纏まって発見されました。直後に私も現地に赴き、まだ作業車などが乱雑していて生々しい山肌に接したことがあります。すぐ向かいの山の中腹には大きな岩が乗り出していて、昔から神秘的な場所、磐座(いわくら)として今日まで崇拝され地名も岩倉として残っているぐらいです。一説によりますと「ヤマト勢力等の外圧に周辺の三十九の国々(集落)の首

長が集まって、銅鐸を埋蔵し外敵から略奪されるのを守った」とも考えられます。

弥生時代末期には出雲固有の文化（四隅突出墳丘墓）が突然消えて畿内のヤマト式の文化が進展するタイミングです。魏志倭人伝で邪馬台国に卑弥呼女王がおり、吉備楯築遺跡では大型の祭祀用墳丘墓が新しく建造中でした。出雲の加茂岩倉に近い荒神谷遺跡からは銅剣 358 本銅鐸 6 個銅矛 16 本等青銅器が大量に発見されました。昭和 59 年（1984）のことです。当時の出雲が九州の銅矛文化に劣らない金属加工の先進地であり、技術を持たないヤマト勢力から見ると喉から手の出るほど欲しい集団でした。記紀でも出雲を脅したり、褒めたり柔和策を講じます。吉備や筑紫の前に、出雲を味方に入れるのですが……。当時の畿内は日本列島の中で遅れていた地域でした。

北部九州では百あまりの国々が争っていたと倭人伝で伝えていて、それまでの銅鐸を全て銅剣・銅矛に铸なおしたため、九州での銅鐸の出土が少なく銅剣・銅矛の進展地になったとの説があります。確かにそうかも知れませんが、銅剣の殺傷力は疑いものです。それよりも銅鐸に代わって祭祀に用いられた新式の祭祀用具と考えてみると理解しやすいと思います。

九州は佐賀の吉野ヶ里遺跡でお解かりの通り、環濠集落を形成し墓は甕棺式で埋葬しますが一部に特別な墓も存在します。弥生の初期に中国の江南地区から漂流してきた農耕民の姿ではなく、華北の魏国と交流し次の世代を構成する新しい息吹を感じます。金属加工技術は列島の中で一番進歩していましたし、中国との交易権も保持していて単なる農耕民の姿ではありません。出雲も先に述べたように四隅突出墳丘墓を有する特異な祭祀を形成していました。吉備はそれらの各地方の文化を術（すべ）からず吸収、特殊器台を用いた双方円墳（前方後円墳の直前の原型）で自分たちの氏族のトップを崇める吉備固有の祭祀を確立します。祖先崇拜から首長崇拜の新しい文化が誕生していたのです。

7) 騎馬民族との合体 海人族の活躍 新しい国体の発生

集団（国々）を具体的に引っ張って行く能力を持った指導者が必要とされました。これまで多くの説明は江南地方を源とする稲作文化・海上から神々が到来したとする祖霊信仰を持った農耕民を描いてきましたが、弥生の末期になると中国を統一した華北の魏国と交流し、朝鮮半島から騎馬系民族の文物が入ってまいります。騎馬民族特有の下辺の短い木弓のことが倭人伝に出ていますが、騎馬民族特有の弓を卑弥呼たちは既に使っていたのです。季節によって位置が変わる太陽ではなく、北極星を中心とする星座の知恵が迷える農民を救いました。草原を駆け回る高天ノ原の

世界は新しい夜明けを意味します。邪馬台国の指導者にこれら騎馬民族の風俗など共通する点が多く出ています。

隣国中国も国体が変わり（西暦 265 年に魏が滅亡）朝鮮半島も激動の時代です。魏国との交流をしていた九州族は勢力のバックアップを失います。畿内を中心とする勢力が吉備の新しい思想と融和し、大国出雲を傘下におさめ、外国との交流権を駆使するために、在来有力な海人（かいじん＝あま）を傘下に抑えます。彼等は交易を通して情報・文化を先取りしていました。記紀の初期の内容は騎馬民族や海人達の活躍を生き生きと描いています。天（あま）＝海（あま）と程よい結びつきをして、先住民の農耕民族＝弥生人と、ここでも素晴らしい融合をしているのです。形の上では前方後円墳式の祭祀を行い、日本固有の鏡を用い道教・儒教・天道の思想で大陸とは一味違う国体が造成されます。騎馬民族が日本列島に弥生末期に到来し農耕民族である弥生人とうまく融和した傍証はいくらでもあります。記紀には海人系神話と騎馬系神話を随所に取り混ぜていて一方的にどちらかが優位な形で支配した形跡を消しているのです。



▲縄文・江南・北方の三民族の融合

図-1 北方系騎馬民族を参照



《第三の融和》

▲3世紀の東アジア

図-3 三世紀の東アジア

信州の安曇は古代海人族の代表格です。筑紫に想定される「天の高天ノ原・天の安川」付近の地名が信州の安曇一帯に広がっています。穂高・有明・筑摩・犀川などがそうですし、（高千穂）穂高神社も存在します。安曇族の本拠地は福岡県の志賀島とされ、多くの海人族の統括集団であり、記紀に登場し後の王家（天皇）に近い有力古代氏族として成長します。後の王家になる騎馬民族は列島支配に海上権を持つ海人族をうまく利用したのです。九州・出雲・吉備の持つ制海権を安曇族にとって変わらせる秘策がありました。

古墳時代を経てヤマトの国体は列強に伍す程の力量に発展します。吉備は重要な役割を果たした痕跡が多く残っています。歴史は面白い。楽しみながら学びを深めて参りましょう。

（会員）

吉備の遺跡を探る 岡山県古代吉備文化財センター

岡山県古代吉備文化財センター

亀山 行雄

岡山市街地の西郊、吉備中山の中腹にある岡山県古代吉備文化財センターは、県内各地に所在する遺跡や出土品（埋蔵文化財）の調査・研究を行う機関として昭和 59 年 11 月に開所しました。主な施設には、外壁に吉備の古代文様をあしらった鉄筋コンクリート造 2 階建（一部 3 階建）の本館をはじめ、数万箱の出土品を収蔵する鉄骨 ALC 造 2 階建の収蔵棟、昭和 17 年に吉備修練道場の大講堂として建設された木造平屋建の児童学習室があります。

開所以来この 32 年間に、ダムの建設や河川の改修、空港や高速道路などの交通網整備、工業団地の造成、病院や各種学校・図書館・総合グラウンドの整備といった国や県による諸事業に伴って発掘調査を行ってきましたが、稲穂の痕が残る縄文土器（総社市南溝手遺跡）や、洪水で埋まった弥生時代の集落と水田跡（岡山市百間川遺跡群）、弥生時代の集落跡に埋められていた銅鐸（岡山市高塚遺跡）、須恵器を焼いた最古の窯跡（総社市奥ヶ谷遺跡）、県内で初めて見つかった埴輪の窯跡（赤磐市土井遺跡）、苫田ダム用地で確認した中世の大規模な居館跡（鏡野町久田堀ノ内遺跡）、大名庭園に設けられた藩主専用の船着き場跡（岡山市後樂園）など、岡山県の歴史を語る上で欠くことのできない重要な発見が数多くありました。

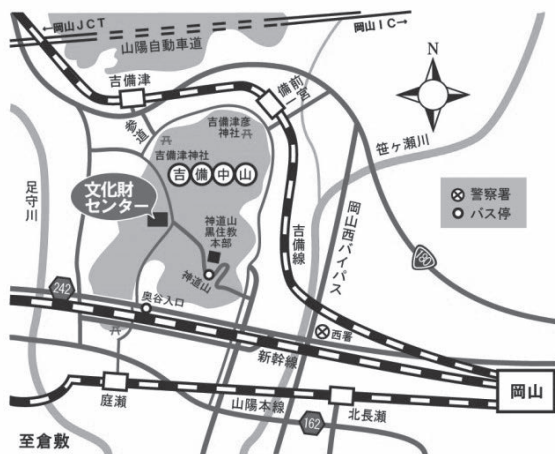
こうした発掘調査の記録や出土品は、センターに持ち帰って整理を行い、学術報告書にまとめて刊行しており、考古学の研究や地域史の資料として活用されています。整理作業を終えた出土品は、県内外の



博物館や歴史資料館へ貸出しを行うほか、センターにおいても本館一階の展示室で、吉備路の遺跡を中心とした常設展示や年数回の企画展示を行うなどして一般に公開しています（年末年始や臨時休館を除く、午前 9 時～午後 5 時）。

また、県内各地に残る遺跡や発掘調査の成果について知識を深めていただくため、県外の研究者による講演会や、センター職員を講師とする学習講座、山城などの遺跡見学会を開催しているほか、子供たちにも遺跡や出土品に親しんでもらえるように、土器や石器作り、鏡の铸造や草木染めなどの体験教室を開催しています。特に、県営総合グラウンドの一面に整備された津島遺跡（国指定史跡）のやよい広場を会場に開催する「津島やよいまつり」では、軟らかい石材を磨いて勾玉を作る体験や、木をこすり合せて火を起こす体験、石器を使って稲穂を摘み取り木製の臼と杵で脱穀する体験、貫頭衣を着用して古代人に仮装する体験などを行っており、毎年多くの参加者でにぎわっています。

こうした催し物や最新の発掘成果は、センターのホームページで紹介しているほか、希望者にはメールマガジンを配信しています。また、センターの施設見学も広く受け入れており、春や秋には多くの小中学生が訪れます。吉備路を散策される際には、是非お立ち寄りください。



岡山県古代吉備文化財センター

〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3

TEL 086-293-3211

<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

歴研サロン 12 月の案内

『池田綱政と後樂園』

講師：杉 嘉夫氏(会員)

杉さんは長年、後樂園のボランティアガイドをされ、平成 26 年 3 月に『岡山後樂園・美しさを伝えるために』を纏められました。なるほど編とうんちく編に分かれています。

日 時：12 月 9 日(金) 13 時 30 分～17 時

場 所：ゆうあいセンター 2 階

定 員：40 名

資料代：500 円

申込み：Eメール 丸谷 憲二

yangirousi@gmail.com

FAX：山田 良三 086-806-2525

電話：長安登美枝 090-7130-2636

岡山県歴史研究会サミット

第 1 回記念講演『歴史「楽」習』

「教育福祉県岡山」創生

講師：松畑 熙一氏

中国学園大学・中国短期大学学長、

元岡山大学副学長

日時：平成 29 年 2 月 18 日(土)

10 時～12 時 開会、記念講演

13 時～17 時 歴史研究会の講演

場所：岡山大学文・法・経済学部 ホール、教室

会費：1,000 円

主催：岡山県歴史研究会サミット

事務局 大原 090-3371-5715

共催：放送大学岡山学習センター

岡山歴史研究会

新春講演会

『邪馬台国は福岡県にあった—
あり得ない畿内』

講師：安本 美典氏

岡山県立高梁高校卒、京都大学文学部卒(文学博士)産業能率大学教授を経て、古代史の研究に専念。「邪馬台国の会」主宰。著書に「卑弥呼の謎」「邪馬台国への道」等多数。

日 時：平成 29 年 1 月 8 日(日) 13 時開場

場 所：岡山国際交流センター

講演会：13 時 30 分～15 時 10 分

座談会：15 時 25 分～16 時

「座談会 邪馬台国九州説と吉備」

参加料：1,000 円(資料代込)

岡山歴史研究会会員 500 円(資料代込)

岡山歴史研究会 新春講演会
『邪馬台国は福岡県にあった—あり得ない畿内』
講師 安本 美典氏
平成29年 1月8日(日) 午後1時開場
岡山国際交流センター
岡山県岡山市中区
講演会 13時30分～15時10分
座談会 15時25分～16時
「座談会 邪馬台国九州説と吉備」
参加料 1,000円(資料代込)
岡山歴史研究会会員 500円(資料代込)
主催 岡山歴史研究会 企画・運営 (共) 吉備の国
後援 アレックス岡山 (共) 岡山県庁 中国建設工業(株)
印刷/編集/イラスト/写真/写真 (共) 岡山県庁 中国建設工業(株)
申し込み先 事務局 大原 090-3371-5715

編集後記

6 月の定例運営委員会で、天野会長が突如、会長職を降りたい、退会したいと表明されたのには驚きました。会報の前号、16 号で、今後の 10 周年に向けて、サロンを備前、備中、美作で開き、かつ個人の研究成果を会報に載せるなどして「研究会」という名称と活動内容がマッチするようにしたいと抱負を述べられていただけに残念です。病とならば受け入れざるを得ませんが。

今回からページ数を増やして 12 ページにしました。個人の研究成果を載せることにしました。丸谷氏による吉備の語源についての研究成果を載せました。興味深いテーマです。

また、山崎氏から「稲作伝来のころ」と題する研究成果を頂き、載せました。

団体紹介は吉備中山にある岡山県古代吉備文化財センターを紹介してもらいました。2,000 年の歴史を誇る吉備の国、岡山にふさわしい内容となりました。(楠)

発行 岡山歴史研究会
会長代行 大田 弘之
編集長 楠 敏明
事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野 504-1
山崎泰二方
自宅電話(兼用) 086-276-6654
FAX(専用) 086-276-2241